

ロンリー・ハート

2007(平成19)年12月8日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★



監督・脚本=トッド・ロビンソン/出演=ジョン・トラボルタ/ジェームズ・ガンドルフィーニ/ジャレッド・レト/サルマ・ハエック (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント 配給/2006年アメリカ映画/107分)

……アメリカ犯罪史上最も凶悪な殺人犯、レイ&マーサが処刑されてから50年余。死刑制度について鳩山邦夫法務大臣が種々問題提起している今、この映画から学ぶことも多いのでは……？ もっとも、マーサは希代の悪女だから、メキシコ生まれの美女が演じているからと決めて決して凶悪犯たちの「愛の物語」を美化しないように……。



今も昔も同じ……？

情報化社会が発達した今でも結婚相談所は大はやりだが、これはフェイス to フェイスを重視する人たちのニーズが途切れないため……？ 他方、出会い系サイトも大はやり。出会い系サイトで出会った男女が、幸せな交際を経てめでたくゴールインというケースもあるのだろうが、その数字は公開されないからその実態は不明。逆に、出会い系サイトで出会った後、結婚詐欺にあったり、暴行されたり、挙げ句の果てに殺されてしまう女性があとを絶たないのが現実。

これは情報化社会の今だけの話かと思うと、そうでもないようだ。1940年代後半、今の出会い系サイトと同じ役割を果たしていたのが、新聞の恋人募集欄“ロンリーハート(寂しい女)・クラブ”。「弁護士と話が長引いてね」と微笑みながら、花束をもって女性の前に颯爽と現れるレイモンド・フェルナンデス(ジャレッド・レト)は、そんなロンリーハート・クラブの愛用者。彼は巧みに女心を操りながら、夫が戦死した女性や未婚の中年女性から財産を騙し取る結婚詐欺師の商売を続けていたが……。

3度目の映画化の見どころは……？

この映画のテーマであるレイ&マーサ事件は、アメリカ犯罪史上最も凶悪な殺人事件と言われているもの。アメリカでは『俺たちに明日はない』（67年）で有名なボニー&クライド事件やこのレイ&マーサなど有名な殺人犯が多いが、これは銃社会と多民族国家アメリカならではのもの……？

このレイ&マーサ事件の映画化は今回で3度目というから、アメリカではレイとマーサの愛の物語（？）がアメリカ国民に強烈なインパクトを与えていることはまちがいない。私はこの映画を観てはじめて知ったのだが、なぜ「愛の物語」と呼ばれているのかがレイ&マーサ事件最大のポイントだし、この映画最大の見どころ。

ちなみに実際のマーサは子どもの頃からの下垂体異常のため、その体重は100kgを超えていたらしい。しかし、チラシでみるマーサは巨乳を誇っている（？）ものの、いかにも悪女的な魅力いっぱいの美女。そんなマーサを演ずるのは、『デスペラード』（95年）や『レジェンド・オブ・メキシコ/デスペラード』（03年）等で私が観たメキシコ生まれの美女サルマ・ハエック。なぜこんな凶悪な殺人犯の物語が「愛の物語」と呼ばれて語り継がれているのか、それをこんな美女（＝希代の悪女）を見ながらじっくりと楽しもう……。

監督は主人公の孫だって……？

この映画の主人公はワケあり刑事のエルマー・C・ロビンソン（ジョン・トラボルタ）。『サタデー・ナイト・フィーバー』（77年）でのカッコいい長身で細身の若者から、今や渋い巨漢俳優に大変身したジョン・トラボルタは、『ヘアスプレー』（06年）ではデブ女役で出演するという奇手を放ったが、『ロンリー・ハート』では、セリフの極端に少ない本来の渋い刑事役をきっちりと……。

ビックリしたのは、この映画を監督・脚本したトッド・ロビンソンは、このエルマー・C・ロビンソンの孫にあたと紹介されていたこと。レイ&マーサ事件は、1970年の『ハネムーン・キラーズ』と1996年の『深紅の愛 DEEP CRIMSON』で過去2度映画化されているにもかかわらず、トッド・ロビンソン監督があえて3度目の映画化を狙ったのは、やはり自分の祖父の自慢話をしたかったのかも……？

いい相棒が大切

刑事は常に二人一組で動くのが原則だから、相棒と気が合うかどうかはすごく大切な要素。その点、自分の妻が自殺したことについて、仕事優先のあまり妻の気持ちを全然理解してやれなかったため自分を責めているロビンソンは、刑事の仕事の第一線を離れて事務仕事に逃げこんでいたから、困ったのは相棒のチャールズ（ジェームズ・ガンドルフィーニ）。そんなロビンソンが突如発奮したのは、浴槽の中で死んでいる、自殺と思われる女の死体を発見してから。遺書があるため既に警察は自殺と断定したのだが、妻の自殺を体験したロビンソンだけは自殺説に異議を唱え、独自に動き始めることに。そうなりゃ、相棒のチャールズだって最初は仕方なく、しかし真相の解明が進むにつれて熱意をもって犯人捜査にあたることに。そして、そのターゲットがいつのまにかレイ&マーサに絞られてきたから、すごいもの。まさに刑事にとって、相棒が何よりも大切！

なぜマーサがレイモンドの最愛の女に……？

レイモンドの人格が突然変わったのは、1945年のある事故で頭を強打し、頭蓋骨陥没の重傷を負ったため。それ以降彼は過剰な性衝動に悩まされるようになったらしいが、それってホントの話……？

それはともかく、レイモンドの結婚詐欺師としての実績は、約2年間に100人以上の女を騙し、何人もの女性と同時並行的に交際を続けていたというからすごいもの。そんなレイモンドにとってマーサはカモの1人だったらしいが、マーサは全然金を持っていなかったから、レイモンドにとってはカモにもならない対象外の女。ところが、なぜかそんなマーサがレイの最愛の女となることに……？

マーサのセックスは、よほどよかった……？

離婚原因としては表面的には「性格の不一致」が最も多いが、ホンネのそれは「性の不一致」かも……？ レイモンドが過剰な性衝動に悩まされる男なら、2人の異なる男の子どもを抱えたシングルマザーであったマーサは、デブ女ながらセックスはよほどよかったらしい……？ それは、スクリーン上でも、レイモンドの蛇行運転をチェックしてきた警察官に対し、マーサのお口によるサービスによってすぐに無罪放免

とされたことによっても明らか……？ もっとも、レイモンドと組んだ後、彼の妹になりすまして金持ち女を騙して金をふんだくってきたマーサだが、嫉妬心は人一倍強かったようで、レイモンドがターゲットの女とねんごろにしていると常にムカムカしていたらしい。トッド・ロビンソン監督は、この映画でそんなマーサの心理と生理そしてセックスの欲望を見事に表現している。死刑の場に臨んでも、その2時間前にレイモンドは「俺が愛した女はお前だけだった」と手紙を送り、マーサは「これで私も喜んで死ぬことができます」と答えたらしいから、女は顔カタチではなくセックスの相性がすべて。この2人をみていると、ついそう思ってしまうが……。

法務大臣は、1951年3月8日の映像をしっかり勉強しよう

安倍改造内閣で法務大臣に就任した鳩山邦夫氏は、①法相が絡まなくても自動的に死刑執行が進むような方法があればと思うことがある、②（死刑執行は刑確定から半年以内という規定について）法律どおり守られるべき、③ベルトコンベヤーというのは何だが、（執行の順序が）死刑確定の順序なのか乱数表で決まっているのかわからない、と死刑制度についてえらく踏み込んだ提言(?)をし注目されている。

たしかに、死刑制度への賛否はともかく、現行法にのっとっていくつかの事件で死刑判決が下されて確定しており、また刑事訴訟法475条では1項で「死刑の執行は、法務大臣の命令による」と定め、2項で「前項の命令は、判決確定の日から六箇月以内にこれをしなければならぬ」と明記されているにもかかわらず、何年間も死刑が執行されないという現実は明らかにヘン……。

ちなみにレイとマーサが組んだ凶悪な犯行が始まったのは1948年からで、逮捕されたのは翌1949年。そして死刑制度のないミシガン州で2人は、「他州には引き渡さない」との約束を信じて自白したが、その残虐さに世論が沸騰した結果、ニューヨーク州知事は犯人の引き渡しを求め、結局2人はニューヨーク州で起訴されたとのこと。そして下された判決は当然死刑。細かい日程までは知らないが、この2人への電気イスによる死刑が執行されたのは1951年3月8日だから、判決確定から死刑執行までそれほど期間が空いていないことがよくわかる。日本の法務大臣はこういう映画を観てしっかり勉強する必要があるのでは……？

ちなみにハリウッド映画ではお馴染みだが、その死刑執行にはエルマー刑事をはじめ数十名の関係者が立ち会いを……。 2007(平成19)年12月11日記